

## 過去36年におけるオーストリア、 ウィーンの変遷 — 主観的印象

元UNIDO主任統計官 山田 哲夫

私が米国留学からの帰国途中、オーストリア人の友人をウィーン市に訪ねたのが1972年の夏、英国留学からの帰国途中、同友人をウィーンに再訪したのが1974年の夏、国連工業開発機関（UNIDO）の技術協力プロジェクトの一つへの参加のため本部（ウィーン）に立ち寄ったのが1976年の11月、同プロジェクト終了後、その報告のためにウィーンに戻ってきたのが1978年の10月、そして1980年4月から2007年12月31日まではUNIDO本部に勤務、その後現在に至るまで定年生活を楽しみながらウィーン（実際はウィーンの郊外の村）に居座っております。要するに過去36年間、ウィーン及びオーストリアの変遷を見てきたわけです（最初の8年間は2年ごとの飛び石観察）。以下、私の目にはウィーンの変化がどう映ったかを主観的に大雑把に書いてみたいと思います。



私の見てきた最初の20年間（1972－1991）にはウィーンは物理的にも民度的にもほとんど変わらなかったような気がします。今日に比べて英語その他の外国語をしゃべらなかった（しゃべれなかった？）人が非常に多く、また町で見かける“外国人らしい”外国人の数もずっと少なかった感じです。オペラ座も市庁舎も外壁は真っ黒。私の覚えている限り、地下鉄開通以前はエスカレーターなどどこにもありませんでした（もしかしたら市内の二つのデパートにはあったかもしれません）。また、少なくとも1970年代前半にはドナウ運河に面した建物のいくつかには機銃掃射の跡がダダダダッと残っていました（本当にそのような跡なのか知りませんがまじめな友人がそのように言って見せてくれました）。

1990年代に入りますとウィーンは急激に変貌（進化？）し始め、日本料理店がにわかに増え始め、ウィーン人は生魚や箸を怖がらなくなり、その後のすしブームを生むわけです。私は日本人の同僚たちと、あたらしい日本食レストランが開店するごとにためし食いに行ったものです。それにしても今ではオーストリアの子供たちまでがごく自然に箸を使うなど1990年以前には想像もつかなかったことです。市内の古い建物も見違えるほどきれい（綺麗及び清潔という二つの意味で）になり中東欧諸国やアフリカ系の人々を中心に観光客以外の外見上及び言語上外国人らしい外国人（ドイツ人はちょっと見ただけではオーストリア人と区別がつかないため増えたか

どうかは定かではありません)もどっと増え、それまではわびしかったショッピング通りの多くはTRENDYな若者指向のものに変わり、入ってみたいくなるような飲食店がつつぎにでき、ウィーンは急速に国際化・モダナイズされていきました。その結果、延々と続いてきた老舗店のうちモデル・チェンジをやりそこなった店の多くは窮地に陥ったようです。オーストリア人も外国人に対して英語を積極的に話すようになりました。

これらの急激な変化、とくに民度の変化は単に冷戦終結やEU加盟によるだけでなく経済・社会の中心を担う人々の世代の交代(戦中世代から戦後世代へ)がもたらしたのでしょう。

私にとってウィーンでの最もショッピングな、あるいは印象にのこる出来事のトップ3は1970年代中ごろのREICHS橋(ドナウ川)の自然崩壊ではなく、やはりUNO-CITY(Vienna International Center-VIC)の設立オープン(1979年)、チェルノブイリ惨事の影響(1986年)及び冷戦終結の具体的発端となったハンガリー政府による東独青年に対するSOPRON近郊の国境開放(1989年)です。

VICに関して:1979年の夏にIAEA、UNIDOなどができたてのVICに引っ越しました。国連職員としての感慨は言うまでもないことです。ただ小国オーストリアの政府(特に国連誘致を決めたクライスキー首相)の国際感覚の鋭さと先見性が深く印象にのこっています。1980年代中ごろまでは地下鉄U4は川向こうまでは開通していなくVICにかよう人達の多くは市電で落っこちたREICHS橋の仮の市電用の橋を渡って通勤したものです。当時はウィーン市には7-8階以上の建物は無く、VICの高層ビル群は目立ちました。

チェルノブイリ惨事の人心に対する影響に関して:同原子力発電所での大事故があった4月の暖かい日には当時小学生だった娘とウィーン郊外の原っぱにひっくりかえって日向ぼっこをしていました。もしかしたら、さんさんと降り注ぐ死の灰を浴びながら。直後オーストリア保健省などがメディアを通して次々に出す深刻なニュースとアドバイス、例えば子供は砂場で遊ぶな、窓は閉めておけ、きのこや木の実を食べるな、雨に濡れるな、等々で人心はパニック寸前。続いてウィーンは雨が降らなかったのが大丈夫、当日の風向きはキエフのほうからでなかったから大丈夫、日本人は海藻をたくさん食べているから放射能を浴びても甲状腺は大丈夫、等々の情報で子供を持つ日本人は一安心。しかし、同発電所から漏れた放射能の多さと当地の消防団員などの被爆の深刻さを知らされるにつれまたまた大心配という具合で、何々に注意せよというニュースや現地の犠牲者に関するニュースに毎日聞き入っていました。

ウィーンから車で一時間位のハンガリー国境の開放に関して:当日その近くでハンガリーの若者たちと大きな集会を開いていた東独青年達が国境に押しかけたところ、当時のソ連政府の実質的同意のもとハンガリー政府が彼らのオーストリアへの国境

通過を黙認し多くの東独青年達がオーストリアを通過して西独へ向かいました。このような事が起こるのは当時としてはすでに時間の問題であったかもしれませんが、しかしウイーンのすぐ近くということもあってびっくり仰天の出来事でした。これに続くベルリンの壁の崩壊、ソビエト連邦の解体、チェコスロバキア及びユーゴスラビアの分裂、両独の合体等々で国際政治の面からも世界の構造と力学的バランスはどういうものになるのだろうかという不安と興味の交差が続きました。国際統計を専門としている私にとっては一度にこんなに多くの新しい国々が出現したりするのはデータ収集上困ることです（これは余談）。

尚、国際化による外国人の流入の増大が犯罪の増加をもたらしたと考えるオーストリア人も（日本人も??）いるようですが統計学を専門とする私にもデータの不足のためその因果関係はまったくわかりません。日本国内ではどうなのでしょう。

いずれにせよ、馬好き、犬好き、山好き、音楽好き、絵画好きの私にとってオーストリアは非常に快適な国です。この国の乗馬環境、犬の社会的地位、山の自然、及びコンサートと絵画展の量と質は少なくとも過去36年まったく変わっていない、つまり最高の水準を維持しているのです。上に記した諸変化は私の一面的な印象であり一歩ウイーンの外にでると町や村のたたずまいと人々の生活に対する考え方（例えば共同体意識）はうれしいことに過去何百年間ほとんど変わっていないと思えてしまいます。